福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

The Wandering Strangers as "pharmakon"in Our Mutual Friend

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木原, 泰紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3052

異人たちの流離 ―『互いの友』における第三項排除 ―
(The Wandering Strangers as "Pharmakon" in *Our Mutual Friend*)

木　原　泰　紀 (*)

(2010年9月30日受付)

序

『互いの友』(*Our Mutual Friend*, 1864-65) の主要人物の一人、ジョン・ハーモン (John Harmon) は、初登場の際、「ロンドンは初めてですか」と訊かれ、「全く初めてです」("An utter stranger") と答えている (33)。英語を直訳すれば、「全くの余所者です」ということになるが、ジョンは幼少期をロンドンで過ごしているので、事実としてはこの言葉は嘘ということになる。しかし、彼の特異な存在性を鑑みれば、彼を「余所者」、或いは「異人」と呼ぶことは、却って彼の本質を言い表していることに気づく。社会学者ジンメル (Georg Simmel) によれば、異人 ("the stranger") とは潜在的放浪者 ("the potential wanderer") であり、共同体から疎外されつつも、共同体から完全に切り離されているのではなく、共同体と何らかの関係性を保持する存在なのだという (143-4)。ジョンは、14歳で父親に勘当され、英国から排除されるかのように海外へ逃れ、諸国を遍歴し、最後はケープタウンから帰国してきたという経歴を持つ。謎に包まれ、偽名を使い分け、「私は多くの国の出身です」("I come… from many countries") と言うジョンは (101)、『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*) のリゴー (Rigaud) を思い起こさせる「コスモポリタン」とも言い得る異人の相貌を纏った人物だと言えよう。

勿論、他のディケンズ作品と同様、『互いの友』には、ジョン・ハーモンだけでなく、ギャファー・ヘクサム (Gaffer Hexam)、リジー・ヘクサム (Lizzie Hexam)、ボフィン (Nicodemus Boffin)、ライダーフッド (Rogue Riderhood)、ブラドリー・ヘッドストーン (Bradley Headstone) 等、排除される運命に翻弄される人物たちが多く登場する。彼らはジョンのような国境を越境する異人(コスモポリタン)ではないが、本質的には同種の存在である。つまり、様々な共同体や領域の内と外を行き交う「潜在的放浪者」なのである。ある意味で、境界こそ彼らの存在領域であり、そして、境界侵犯の身振りの中で、彼らは二重的な (或いは多重的な) 存在性を担わされていると言い得るの

*福井大学教育地域科学部人間文化講座英米文学

ではないか。ジョン・ハーモンがジュリアス・ハンドフォード（Julius Handford）、ジョン・ロークスミス（John Rokesmith）という別名を持つことは、そのことを端的に表している。

ジョナサン・アラク（Jonathan Arac）は、『互いの友』の登場人物を3つのグループに分けている。ヘクサム家、ライダーフッド等を含む「川のグループ」、ボフィン夫妻、ウィルファー家等を含む「塵芥の山のグループ」、そしてポドスナップ家を中心とする「社交界のグループ」である（175）。このとき、「社交界のグループ」を中心に、「川のグループ」と「塵芥の山のグループ」がこの世界の辺境に位置する見取り図を容易に思い浮かべることが出来るだろう。事実、地誌的にも、テムズ河は歴史的にロンドンの南の境であったし、塵芥の山のあるホロウェイ地区はこの当時北の境と看做すことができたようだ。このように、排除の構造が鳥瞰的に可視化されていることは実に興味深い。ではまず、南の境を標す「川のグループ」に属するテムズを流離う異人たちの姿、そして彼らの映し出す川辺の情景を見てみよう。

Ⅰ. 川辺の住人

川辺の住人とは、日本で言えば、中世以来賤民として排除され、蔑まれてきた「河原者」に相当すると言って良いだろう。勿論河原者のように明確に賤民と位置付けられていたわけではないが、ヴィクトリア朝の川辺関係者も社会の中で排除され、周縁に位置付けられた存在である。この物語の冒頭に登場する「溺死体釣り」を生業とするギャファー・ヘクサムは、この物語の川辺の住人を象徴する存在だと言えるが、彼に与えられた「半ば未開人」（13）、「猛禽」（14）、「ハゲタカ」（16）といった形容は、彼の剣呑な存在を端的に表していると言える。[1] 実際、娘のリジーさえ、彼の生業に少なからぬ忌避感を露にしている。それは直接的には溺死体への嫌悪から来るようだが（15）、おそらく川そのものと深く結びついた死の感覚に由来するのではないか。後にギャファー自身が川（テムズ河）に呑み込まれ、その生を終えるが、リジーは川を「父の墓」と呼んでいる（227）。おそらく川の民への排斥の背景には、川と分かち難く結びついた死の影を遠ざけようとする心性が関与しているのだろう。

この物語において、川はまさしく死の風景を現出する。テムズが呑み込んだ犠牲者は、ジョージ・ラドフット（George Radfoot）、ギャファー、ジェニー・レン（Jenny Wren）の祖父、ライダーフッド、ヘッドストーンの五人を数え、さらに陥溺し、臨死体験をする者は、ジョン・ハーモン、ライダーフッド、ユージーン・レイバーン（Eugene Wrayburn）と三人にも上る。当時、自殺者を含む溺死者が実際に多かったことが背景として考えられるが、先に触れたように、元来川が「死」と常に関係付けられてきたことも看過できないのではないか。前述した「河原者」の役割の一つは、葬送の儀の執行であったということだが（網野 144）、中世ヨーロッパにおいても、「河川は冥府への入り口」と考えられ、川にかかる橋のたもとに小聖堂を建て、神への祈りを捧げたようである（阿部『中世を旅する人びと』33）。実際、18世紀までテムズに架かる唯一

の橋であったロンドン橋には、かつて「聖トマス礼拝堂」が橋の中ほどに建てられていた（橋とともに1209年に完成し、1553年に取り壊されている）。このような、この世とあの世の結節点としての川という考えは、この物語にも見ることができる。次の場面には、夜の暗い川辺の情景とそこに佇むリジーの心の内が示されている。

> The night was black and shrill, the river-side wilderness was melancholy.... And as the great black river with its dreary shores was soon lost to her view in the gloom, so, she stood on the river's brink unable to see into the vast blank misery of a life suspected, and fallen away from by good and bad, but knowing that it lay there dim before her, stretching away to the great ocean, Death.（76-7）

ポール・ドンビー（Paul Dombey）やバーキス（Barkis）の死の場面にもこの死を誘う海のイメージは見られるが（但し、海は生を育む場でもあるのだが）、リジーには、目の前の冥い川は、流れ行く先の大洋、死の世界を媒介する生と死の境界なのである。また、川での死体漁りに勤しむギャファーは、死体のポケットを窺う行為を弁解して、死人の居場所は「あの世」だが、金の所属は「この世」なのだからと嘯く（16）。その意味では、テムズの上に浮かぶギャファーは、この世とあの世の狭間を漂う異人、あるいはまさに三途の川を行き交い、死者から渡し賃を取るという渡し守カロン宛らではないか。

しかし、何よりテムズという境界領域を体現する表象こそ、この物語を代表する異人、ライダーフッドだと言えよう。ギャファーと同様、「死体漁り」を生業とし、テムズで溺死しかけ、そして水門の代理番に転職し、ついには本当に溺死してしまう。まさに徹頭徹尾テムズとの関わりの中に存在すると言えるが、最初はイーストエンドに位置するライムハウス・ホールの住人として登場する。やはりテムズに面したライムハウス・ホールは、「水辺の住人を詰め込んだ船倉」と形容されているが、この「船倉」の中でも、ライダーフッドはさらに「深く暗い」所に棲息している（344）。ライムハウス・ホールの水辺の住人たちからさえ排斥され（344-45）、極めて濃い影に覆われたライダーフッドは、正に境界領域を漂うことが彼の存在意義であるかのようである。

実際、ライダーフッドは、結局テムズを漂流するかのように（西に向かって、つまり上流に向かって）、プラッシュウォーター水門へと辿り着く。[2] 先述したように、溺死を危うく免れ、何とか蘇生することができたのだが、まさに生と死の境という究極の境界を流離ったことになる。[3] その後、この水門の代理番としてベティ・ヒグデン（Betty Higden）の前にその姿を現すのである（ヒグデンもまた川という死の空間に引き寄せられるかのようにテムズを遡り、川辺で息を引き取る）。次は、彼と死出の旅路を行く巡礼ヒグデンとの邂逅場面である。

A barge was being towed towards her [Betty Higden], and she sat down on the bank to rest and watch it. As the tow-rope was slackened by a turn of the stream and dipped into the water, such a confusion stole into her mind that she thought she saw the forms of her dead children and dead grandchildren peopling the barge, and waving their hands to her in solemn measure.... When she looked again, there was no barge, no river, no daylight, and a man whom she had never before seen held a candle close to her face.（500）

薄れ行く意識の中で、ヒグデンはすでに亡くなっている自分の子どもや孫の乗った川舟の幻を視る。そして、意識が戻ったとき、目の前に見たことのない男、つまり水門番のライダーフッドが現れるという場面である。ヒグデンにとって、水門番というよりまさに死の世界への扉の番人といったところだろうか。このあと、ライダーフッドはヒグデンからなけなしの小銭を掠め取るが、前述したギャファーと同様、如何にも渡し守カロンを彷彿とさせるではないか。

しかし、テムズは同時にロンドンの実質的な境界でもある。典型的な中世都市ロンドンは周囲を城壁に囲まれていたが、南は自然の要害テムズ河が境界の役割を果たしていた。[4] 故に唯一の橋、ロンドン橋のサザック側には橋門（曝し首の場所でもあった）とはね橋が設置され、サザック側からの敵の侵入を阻止する構えとなっていた（出口 47）。つまり、このような境界の設置が意味するのは秩序空間の形成である。境界の外は秩序を脅かす様々な脅威に満ち溢れ、原初的には混沌の闇の世界が広がっていると考えられたのである。伝承的社会では、閉ざされた世界が構築され、その世界の外側には「悪魔、怨霊、死者、よそ者の未知の恐ろしい領界、つまり、混沌（カオス）、死、夜がある」と考えられた（エリアーデ 52）。つまり、ここに「我らの世界」と「彼らの世界」という二項対立が生まれ、例えば、古代ギリシア人は、「彼ら」を「バルバロイ」（外国人の意）と呼んだのである。そして、境界は外の世界との接点であるが故に、また中心から離れた周縁であるが故に、秩序世界において排除される人々、例えば、行商人、遍歴の職人、見世物師、ユダヤ人、ロマニー（ジプシー）などの異人たちの集う非日常的空間となったのである。赤坂憲雄は「境界は相接するいずれの側にも帰属せぬ空虚な地帯として表象され」、「そこはときに市場となり、ときに戦場となった」と述べているが（44）、まさしくロンドンも、北側の市壁のすぐ内のスミスフィールドの地にバーソロミュー・フェア（12世紀）が開かれたことはよく知られているし、テムズの側も、ロンドン橋は南の要衝であったため、「ロンドン橋の戦い」（10世紀末のエセルレッド王とデイン人との戦い）や「ワット・タイラーの乱」（1341年）（この物語中にも言及がある。147）など、度々戦いの舞台となった。また、ロンドン橋のすぐ南側、つまりサザックが言わば歓楽街であり、16世紀には多くの劇場で賑わったことも、境界という中立地帯のもつ混沌と非日常性という性格が関与しているように思われる。日本の「河原者」も、広義には芸能に携わる者を含むようだが、同様に、バーソロミュー・フェアの見世物師たちやサザックの劇場に集う演劇人たちもまた異人の面差しを纏っていたのである。

勿論、ヴィクトリア朝のロンドンには市壁もなく（18世紀にほとんどが取り壊された）、テムズ河にも新しいロンドン橋（1831年完成）を含む多くの橋が架けられていた。何よりロンドンが膨張し、かつてのロンドン（シティ）はその一部に過ぎないという変りようである。しかし、それでもテムズは、少なくとも意識の上では、依然ロンドンの南境として機能していたのだと考えられる。例えば、“cispontine”というおそらく19世紀起源の語がある（*OED*の用例は２つで、1860年と1864年の例が記されている）。「橋のこちら側の；（Londonの）テムズ川にかかる橋の北側の」（『ジーニアス英和大辞典』）という意味だが、この語の含意するところは極めて興味深い。まず視点がテムズの北側にある。つまりロンドンの中心、秩序の中心から南を眺め、そしてテムズを境に設定し、その手前側を「我らの世界」として囲い込む、といった意識が感じられないだろうか。当然、向こう側は「彼らの世界」であり、秩序を欠いた混沌の空間が広がるという訳である。

ヘッドストーンの勤務する貧民児童対象の「国民学校」（national school）の近辺はまさにそのような場所、川向こうの「彼らの世界」として描写されている。コッツェル（Michael Cotsell）によれば、場所はバーモンジー、つまりサザックの東隣、あるいはロンドン塔の東隣りのウォッピングの対岸（つまりテムズの向こう側）である（135）。[5]

> The schools—for they were twofold, as the sexes—were down in that district of the flat country tending to the Thames, where Kent and Surrey meet, and where the railways still bestride the market-gardens that will soon die under them.... They were in a neighbourhood which looked like a toy neighbourhood taken in blocks out of a box by a child of particularly incoherent mind, and set up anyhow; here, one side of a new street; there, a large solitary public-house facing nowhere; here, another unfinished street already in ruins; there, a church; here, an immense new warehouse; there, a dilapidated old country villa; then, a medley of black ditch, sparkling cucumber-frame, rank field, richly cultivated kitchen-garden, brick viaduct, arch-spanned canal, and disorder of frowziness and fog. As if the child had given the table a kick, and gone to sleep.（219）

「気まぐれな子が箱から積み木をばら撒き、どうにか拵えたおもちゃの街並みのよう」、あるいは「子どもがテーブルを蹴飛ばしたまま、寝室に行ってしまったかのよう」といった比喩が示すように、如何にも雑然とした極めて無秩序な情景である。新しいものと古いものが同居し（例えば、鉄道と古い崩れかけた別荘）、農村風景なのか、商業地区なのか、地区の性格も全く判然としない、まさに雑多な寄せ集めの様相を呈している。要するに、新しいものが形成されようとしている途中の段階が示され、しかも「未完成なのに、もう朽ち果てようとしている街並み」に象徴されるように、古いものから新しいものへ向かう明確な道筋が全く見えてこない手詰まりの様相が

示唆されている。つまり、境界領域特有の二つの世界に引き裂かれている状況が示されていると言える。混沌から秩序へ向かう途中段階の曖昧模糊とした状態と言ってもいいかもしれない。そして、この情景の中心にある貧民の子供を教化する学校という記号が、この葛藤の様相を顕示しているのではないか。例えば、上の比喩の中の「子供」という項そのものが、この場の過渡性を象徴している。つまり、大人という秩序の存在へと向かいつつある、いまだ未完成で無秩序な子供という存在性が、古いものと新しいもの、農村と都市、自然と文明といった様々な二項対立を抱え込んだこの学校を取り巻く場を象徴している。さらには、教化される貧民の子供となれば、通常の子供以上にこの過渡性の様相は際立つ。チャーリー・ヘクサム（Charlie Hexam）が最初に登場したとき、「彼の中の未完成の野蛮と未完成の文明の奇妙な混合」(28) が指摘されているが、この奇妙な混合は、程度の差はあれ、貧民学校（ragged school）や国民学校に通う子供たち全員にも当て嵌まるのではないか。さらには、チャーリーのみならず、（先述のように）ギャファーも「半ば野蛮人」と形容され（13)、またヘッドストーンも、彼の中には「動物的なもの」があると述べられているように（218)、この未完成の秩序という標しは、子供だけでなく、貧民階層全体を遍く覆っていると考えられる。

このように、この「テムズの橋向こうの」（“transpontine”）場所は、ライダーフッドの川辺の風景とは異なるもう一つの川辺の風景を映し出している。ライダーフッドは、川に暗く深く沈潜し、棲息し、混沌の川を水平移動するに過ぎないが、チャーリーは、川辺から逃げ出し、秩序に向かって垂直移動を試みる。しかし、秩序の世界に辿り着くことは、新たな階級への移動を意味し、階級と階級の境界を行き来せざるを得ないのである。川の穢れを払拭することは容易ではない。結局、ヘッドストーンのように、「動物的なもの」を隠蔽できず、「晴れ着を着た機械工」(218) という二重の存在として生きていかざるを得ないのではないか。そして、ヘッドストーンの行き着く先は、やはり川であった。

Ⅱ. 山の民

排斥されし辺境の住人と言えば、川の民だけではなく、山の民も忘れることはできないが、なるほど、北の境は言わば山の民の世界である。但し、山と言っても、塵芥の山である。とは言え、「山の文化」を代表する牧人が古来よりヨーロッパでは賤視されてきたこと（Burke 31)、さらに、牧人が冬の間行う副業の中に、「塵芥集め」が含まれていた例もあることを考え合わせれば（阿部『中世を旅する人びと』136)、この結び付きも強ち故なしとも言えないのではないか。以下は、ウィルファー（Reginald Wilfer）の帰宅途中に現れる塵芥の山の光景である。

His home was in the Holloway region north of London, and then divided from it by fields and trees. Between Battle Bridge and that part of the Holloway district in which he dwelt,

was a tract of suburban Sahara, where tiles and bricks were burnt, bones were boiled, carpets were beat, rubbish was shot, dogs were fought, and dust was heaped by contractors. Skirting the border of this desert, by the way he took, when the light of its kiln-fires made lurid smears on the fog, R. Wilfer sighed and shook his head.（41-2）

このバトル・ブリッジ（現在のキングス・クロス）からホロウェイにかけての地域は、まさにロンドンの北の「境」を標している。煉瓦、骨、闘犬などの記号が示すように、まさしく秩序から見捨てられた剣呑な境界領域の様相を呈している。しかし、とりわけ塵芥の山こそこの場の象徴と言えるであろう。後に、ボフィンが、「ボフィンの東屋」別名「調和の牢獄」の位置を、「バトル・ブリッジからメイデン・レイン沿いに北に１と４分の１マイル行ったあたり」と説明していることから見て（60）、上の引用には言及されていないが、この塵芥の山はボフィンのものであろう（コッツェルによれば、実在した塵芥集積所「ベル・アイル・シュート」の場所に一致する）（58）。ボフィンは「ボフィンの東屋」からキャヴェンディッシュ･スクエア（秩序の中心）へ引っ越し、「社交界（ソサイエティ）」への参入を試みるが、元来やはり塵芥収集人は社会的に排除されてきた存在であった。阿部謹也によれば、ドイツでは18世紀においてなお「道路清掃人」と「川掃除人」が帝国法令によって賤民に指定され、民衆の間でも汚物を処理する者が「デーモン」と同一視されたとある（『中世賤民の宇宙』 246）。つまり異教的精神の残存が賤視に大きく関わっていたようだ。ピーター･バーク（Peter Burke）は、中世以来変わらぬ民衆文化をなお留める多くの辺境の地を詳述しているが、例えば、ジョンソン博士とボズウェルが見聞きした、ヘブリディーズ諸島の妖術、魔術の信仰を例の一つに挙げている（275）。つまり、18世紀においてもキリスト教文化の支配を擦り抜けて存続してきた異教的な民衆文化を留める地域や集団が少なからず見られ、またそのことが「魔女狩り」等として顕在化する迫害、賤視の謂われの一つとなったと考えられる。そして、その様相はとりわけ特殊な場所、特殊な職に集約されていたようである。

勿論、19世紀ロンドンの塵芥収集人が全く同様の状況にあるわけではないが、それでも塵芥収集人には、通常の文化コードからの逸脱を認めることができるようである。ヘンリー・メイヒュー（Henry Mayhew）は『ロンドンの労働とロンドンの貧民』の中で、塵芥収集人の多くが文盲であること、教会に行く習慣がないことを述べている（Ⅱ. 176）。ボフィンもまた文盲であり、ケトル（Arnold Kettle）がボフィン夫妻に「民衆性の代表」を見ているように（221）、ボフィンには古来より存続してきた民衆文化の名残りを認めることができる。大きな杖を常に携行する彼の様子には魔法使いを彷彿とさせるものがあるが、実際、その杖が「使い魔」（“Familiar Spirit”、魔法使いに仕える魔物）に見立てられている個所がある（93）。あるいは、杖を抱えた様子が「パンチとジュディ」のパンチにも準えられている（100）。パンチは、妻子を殺し、死刑執行人を逆に刑に処し、ついには悪魔と戦い、勝利を収めるという、善悪を超越した、生のエネルギーに満ちたアンチ・ヒーローであり、滑稽で猥雑な民衆性を体現する存在だと言える。ロバ

ート・リーチ（Robert Leach）は、パンチと、英国伝承の悪霊パック、北欧神話のロキ、ギリシア神話のパンとのトリックスターとしての共通項を指摘し、パンチの異教性を主張している（175-77）。また、そもそもボフィンの名前自体に異教性が潜んでいる。彼のニコデマス（Nicodemus）という名は、ヨハネの福音書（3.1-6）に登場する、密かにイエスを訪れ改宗するパリサイ人に由来すると考えられるが（Cotsell 57）、その由来自体に反キリスト教的要素が認められる。しかも、その通り名の「ニック」（“Nick”）、「ノディ」（“Noddy”）にも隠微なる異教性が刻印されている。つまり、ニックには「悪魔」の意味が、ノディには「馬鹿、まぬけ」の意味があり、すなわち、悪魔と道化（フール）の組み合せということになる。例えば、ウィルフォード（William Willeford）は、「コンメディア・デラルテ」の代表的な道化「ハーレクィン」の古い起源とその変遷について、「悪魔からトリックスターへ、さらに道化へ」の変容であることを指摘している（90）。この悪魔は北欧神話の主神オーデンの異型を意味する。つまり異教の神の悪魔化の一例であり、民衆文化の中で、トリックスター、そして道化へと変容し、生き残った典型例として看做すことができるだろう。前述のパンチも「コンメディア・デラルテ」の登場人物であり（「プルチネラ」という名であるが）、さらにその起源を古代ローマまで遡ることが可能だという（Welsford 304）。このように、ボフィンに刻印された異教的、民衆的表象は、彼の境界の住人としての存在性を明らかにしていると言える。また、先述のニコデマスという名の聖書にみられる改宗にまつわる逸話は、改宗という文化の壁を越境する行為において、彼の境界の住人に相応しい二重的存在を示唆しているのではないか。

ニコデマスという名に隠された聖書の逸話には、もう一つ留意すべき点がある。イエスがニコデマスに「人は水から、そして霊から生まれない限り、神の王国を見ることはできない」と述べているように（ヨハネ3.3）、改宗に伴う「洗礼（バプティズム）」の儀式、つまり水の再生機能がその名に含意されているのである。ケトルはこの物語の２つの象徴、川と塵芥の山をジョン･ハーモンが結び付けることを指摘しているが（214）、ここにもう一つの回路を見出すことができる。ユージーンの水による再生は、ボフィンの名において予兆されているのである。実は、メイヒューによれば、現実に塵芥の山はテムズ河畔に多く見られたということであり（Ⅱ.171）、実際、ボフィンの山のモデルとなったベル・アイルの近くにはリージェント運河が流れている。塵芥の処理には川の水を必要としていたという事実から、実は両者は元来強く結びついていたようだ。また、中世以来の古い習俗からも両者の結びつきを見ることができる。阿部によれば、中世においてはエレメンツ（土・気・火・水）に関わるものが大宇宙（マクロコスモス）の混沌、神秘性の影響を受けると考えられていたため、水は「大宇宙に由来する不可解で神秘的なるもの」であり、土も「不可思議なる霊力に満ちたもの」であった（阿部『中世賤民の宇宙』242-46）。故に、土と水に関連する塵芥を扱う者、例えば道路清掃人と川掃除人は魔術的な存在として、特別視され、やがて賤視されたのである。また、彼らの扱う汚物、泥、糞尿、埃などは、腐敗という言わば魔術的現象により、聖なるものとみなされ、特に生殖能力と関連付けられていた。例えば、先述のハーレ

クィンは汚物を撒き散らしながら歩き回るということだが、それは生殖魔術の道具なのだという(247)。ある意味で、ヴィクトリア朝においても、魔術的生成の様相を認めることができる。ギャファーやライダーフッドは、川の底の泥の中から死体を釣り上げ、生活の糧を稼ぎ出し、そして、オールド・ハーモンやボフィンは塵芥の中から大きな財を生み出している。この新たな錬金術がやはり水と土に連関していることは興味深い。

この錬金術に関連して、R・H・ホーン（R. H. Horne）の「塵芥、或いは贖われた醜悪」（“Dust; or Ugliness Redeemed”）の存在を無視することはできない。『家庭の言葉』（*Household Words*, 13 July, 1850）に掲載されたこの物語は、ハンフリー・ハウス（Humphry House）やフランク・ギボン（Frank Gibbon）によって、『互いの友』の塵芥の山の情報源の一つであることが指摘されている。大意を記せば、塵芥の請負業者の元で働く三人の塵芥篩いが山の傍に流れる運河から溺死体を引き上げ、秘術を施して甦らせるというものである。留意すべきは、塵芥の山と運河が併存し、塵芥と水の結びつきが前提となっている点、そして甦らせる秘術に塵芥、灰が大きく関与している点である。死体を塵芥の灰の中に埋め、太陽と灰の力で蘇生させるというメカニズムが説明されているが、ギボンは、この仕組みにケペラという太陽神に纏わるエジプト神話を重ね合わせている（142）。甲虫スカラベをシンボルとする日の出の太陽神ケペラには、一日の始まりを標す日の出、つまり夜に呑み込まれた太陽の甦りという更新作用と、太陽に準え得る甲虫の転がす球状糞（球体の回転）の再生機能、すなわち糞に産みつけた幼虫の孵化という現象との相似性が含意されている。ホーンの「塵芥」の根幹にはやはり異教性が色濃く投影されていると言える。そう考えれば、この物語が換骨奪胎された『互いの友』は、ニコデマスと同様、言わば改宗の介在、つまり塵芥の魔術的生成から水の再生機能への変換を経て再生されたと言えるのではないか。ホーンの「塵芥」を通して、『互いの友』、そしてボフィンの異教的出自を透かし見ることができるのである。

では最後にボフィンの錬金術について考えなければならない。そこには、やはりヘルメスという異教の神（盗み、商売、境界の神）、言い換えれば神話世界最大のトリックスターが関わっている。この物語の中では、メリクリウス（Mercury）というローマ名での言及を一箇所見つけることができるが（第 2 部第 5 章の章題、266）、この章で披瀝されるフレジビー（Fledgeby）の秘密に関わって言及されている。つまり、メリクリウスの商売の神という属性が彼の隠された生業、金貸し業を仄めかしているのである。表向きは紳士、裏の顔は高利貸しというフレジビーもまた二重的存在、すなわち二つの階級に跨って存在する境界の住人だと言えるが、[6] このことも境界の神ヘルメスの属性であり、境界の侵犯の中に商売、盗みといった属性が派生して現れると考えて良いだろう。そして、このフレジビーの越境の行為は、実は新たな錬金術をもたらしているのである。つまり、彼は高利貸しで得た汚い金を階級の境界を通過させることによって清浄な金に変換しているのである。まさに現代の錬金術、マネーローンダリングを行っていると言えよう。そして、ボフィンも同様の行為を行っている。オールド･ハーモンの残した穢れた金を見事に清

浄な金へと変換するという離れ業である。

ボフィンもまた境を越える者である。まず、階級の越境として、オールド･ハーモンの遺産を相続し、勇躍社交界へ乗り込んでいく。まだキャヴェンディッシュ･スクエアへ移る前、夫婦の趣味の違いから「上流と快適」（“Fashion and Comfort,” 63）に二分されているという奇妙な家の状況が示されているが、この空間はまさに彼の二重的な存在を如実に表している。自ら親しんだ快適な階級とこれから参入していく上流の階級の様相が擬似的な空間の中に現れている。しかし何よりボフィンの二重性が顕著に現れているのが、寛容で善良なボフィンから卑劣な吝嗇漢ボフィンへの変身である（見せ掛けの変身ではあるが）。この二重性は紳士と高利貸しを同時に体現するフレジビーに実に酷似していると言えよう。要は穢れたものを如何に浄化するかである。混沌を如何に秩序に変換するかと言い換えても良い。しかし、秩序や浄化は穢れや混沌無しに存在することができないのも事実である。穢れや混沌を潜り抜けた後に清浄や秩序が現れるのである。まさに、異教的なもの、悪魔、トリックスター、道化といった存在は、穢れを身に帯びるという汚れ仕事を引き受けているのである。ルイス・ハイド（Lewis Hyde）は、ユングを援用し、「メリクリウスはいわばキリストの影であり、新しい太陽を浄化することによって生まれ出る汚れを具現している」と述べている（182）。つまり、ボフィンの変身とは穢れを一身に引き受けるということである（ボフィンが元来「塵芥篩い」であったことを忘れてはならない）。そして、留意すべきは、このボフィンの穢れがやはり影の世界と結び付けられていることである。以下、ボフィンの変身の様子が描かれている。

> The breakfast table at Mr. Boffin’s was usually a very pleasant one, and was always presided over by Bella. As though he began each new day in his healthy natural character, and some waking hours were necessary to his relapse into the corrupting influences of his wealth, the face and the demeanour of the Golden Dustman were generally unclouded at that meal. It would have been easy to believe then, that there was no change in him. It was as the day went on that the clouds gathered, and the brightness of the morning became obscured. One might have said that the shadows of avarice and distrust lengthened as his own shadow lengthened, and that the night closed around him gradually. (574-75)

ハイドはヘルメスが住居の洞窟の敷居に立ち､暗闇と光の境界に位置するというトポスに留意し、ヘルメスの本質を暗闇のヘルメスと光のヘルメスという二重的な存在として捉えている（208-9）。同様に、引用最後に「彼自身の影が長くなっていくにつれて、貪欲と不信の影も長くなり、次第に夜の闇が彼を包んでいく」とあるように、ボフィンの変身が光と影、昼と夜の対比の中で描かれている。そして、ある朝、ついにボフィンは「漆黒の真夜中を連れて登場する」ことになる（575）。まさに夜の勝利である。しかし、もちろん昼と光は盛り返し、ベラと和解をする彼の

「蘇り（黄泉帰り）」の場面では、影は払拭され、ボフィンは全身、頭の先から足の先まで光輝くことになる（755）。そして最後にボフィン夫人は「暗闇でさび付いていたオールド・ハーモンの金がこうして陽光の中できらきら輝き始めた」（757）と宣言するのである。かくして、穢れた金は清浄な金へと見事に変換されたのである。しかし、ボフィンの錬金術はマネーローンダリングだけではない。ホーンの 3 人の塵芥篩いが溺死体を蘇らせたように、欲得尽のベラを覚醒させ、ジョンにハーモンという名を取り戻させたのである。ジョン・ハーモンの溺死が確定され、その存在が社会的に消え去っていたことを考えれば、まさに溺死体を蘇らせたと言えるのではないか。

ボフィンが代表する塵芥の山という境界の世界は、川辺の世界と異なり、幾分現実感に欠ける印象がある。ボフィンの体現する異教的な、そして神話的な表象が影響しているのかもしれない。神話は時間感覚を無効化してしまうからであろうか。その意味で、ボフィンのこの物語に対峙する位置が、他の登場人物と少し異なっているように思える。ある意味で、ボフィンは物語の内と外を自由に往来しているかのようである。[7] 物語の境界をも侵犯しうるのかもしれない。例えば、彼の変身の演技が語りの中で隠されているという事実は、語り手との結託を含意しているようにも思えてくる。また、彼の言った「互いの友」（“Our Mutual Friend,” 180）という言葉がこの物語のタイトルになっているという事実もこのことを裏書きしているようにも思われる。

Ⅲ. 第三項の排除

では、川辺の住人や塵芥の山の住人が排除されるときに行使される力について考えてみよう。この排除の構造を考える上で、やはり排除する側、つまり「社交界のグループ」を見なければならない。その中心であるポドスナップ（Podsnap）の掲げる「ポドスナッパリー」（“Podsnappery,” 131）という生活指針の中に排除の構造を見ることができる。

> Thus happily acquainted with his own merit and importance, Mr. Podsnap settled that whatever he put behind him he put out of existence. There was a dignified conclusiveness —not to add a grand convenience—in this way of getting rid of disagreeables which had done much towards establishing Mr. Podsnap in his lofty place in Mr. Podsnap's satisfaction. “I don't want to know about it; I don't choose to discuss it; I don't admit it!” Mr. Podsnap had even acquired a peculiar flourish of his right arm in often clearing the world of its most difficult problems, by sweeping them behind him (and consequently sheer away) with those words and a flushed face. For they affronted him. (131)

ポドスナップの「気に入らないものを片付けてしまう」やり方、それに伴う「右手を独特に振り回す」動作から排除の意思を見出すことは容易である。自己満足と不愉快なものの拒絶を旨とす

るポドスナップは、要するに厳然たる「我らの世界」を構築し、高い壁を張り巡らし、「彼らの世界」を徹底的に排斥する構えである。まずは、「彼らの世界」は英国以外の外国を指示し、「非英国的なもの」は例の右手の一振りで一掃されてしまう（131）。しかし、英国全体が「我らの国」なのではない。英国の不愉快なものは当然排除されることになる。当時新聞を賑わせていた餓死する者が続出していた問題が話題に上がったときも、彼はその事実自体を認めようとしない（143）。また、フランス人に対し、言葉の“ｈ”を落とす発音を厳しく矯正し、英国の中で“ｈ”を落とすのは下層階級だけだと述べている（136）。彼にとって下層階級はフランスと同様、「彼らの国」に過ぎないのである。

この下層階級排除に関して、「第三項（ファルマコン）排除」の観点から考えてみよう。[8] 今村仁司は簡潔に次のように述べている。「第三項排除とは……二人の人間が交通しあうためには、必ず第三者を排除しなくてはならない、ということである」（『暴力のオントロギー』232）。私（私達）と貴方（貴方たち）という二項に対して、彼（彼ら）という第三項が排除されるという構造である。もちろん、下層階級は、上、中、下という３つの階級の中の第三の階層ということであり、フランスの「第三身分」を想起すれば、その項への位置付けは明らかであろう。今村はさらに次のように述べている。

> 第三項は、二項対立的関係を維持したり、あるいは二項関係が危機におちいって回復を要求したりするときには、必ず運命的に発生する社会関係の根本動学を示唆する。第三項は、相互性の存立のために、つねに必ず、暴力的に抑圧され、排除され、あるいは殺害される。典型的なケースが、供犠であり、身替り犠牲であり、荒地への追放であり、異人化であり、その他、いろいろと人類学的観察事例はきわめて多数ある。（『暴力のオントロギー』29）

先述の大勢の餓死する者の姿は、この第三項排除の文脈で捉えれば、彼らは秩序の安定のために殺されたのである（マルサスの『人口論』を思い出してもよいだろう）。これも、ある意味で、一種の供犠である。つまり、古代世界においては、供犠は秩序創設のための必要不可欠な儀礼であり、「秩序づけられた暴力的エネルギー……のずらしの時と場所」（『排除の構造』153）なのである。前述したボフィンの穢れを一身に身に纏う行為は、もはや供犠の行為として捉えることができるだろう。問題は、古代世界においては、「褻（け）」と「晴れ」が画然と分けられ、供犠は当然「晴れ」という特別な時期に限定されていたが、近代以降の社会においては、「褻」と「晴れ」の区別がなく、日常の中に無差別に供犠的事象が発現していくことである。その意味では、現代は秩序づけられていない暴力的エネルギーに満ちていると言えるのかもしれない。

そして、この物語の多くの登場人物もこの排除という暴力（第三項排除）に晒されている。今村は、「人間関係は、どのような関係であれ……事柄の本性上、三角形的なのである」（『暴力のオントロギー』232）と述べているが、この物語にも多くの三角形を見ることができる。[9] 極め

て日常的レベルでは、チャーリーがユージーンに対して（ヘッドストーンの同席の上）、意図的に三人称“he”を使い続ける場面（288）、ヘッドストーンとリジーに対して、ジェニー・レンが自らを「第三者」（338）と呼び、退出していく場面、或いは、ベラとジョンの様子を眺めるウィルファーが「第三の子鬼」と喩えられている場面（596）等が確認できる。どれも取るに足らない場面だが、三人の関係と第三項の印付けにおいて、やはり排除の素振りが紛れもなく前提にあると考えられる（第一例は顕著である）。その他、遺書探索に関わるボフィンとヴィーナス（Venus）に対するウェッグ（Silas Wegg）、選挙騒動におけるヴェニアリング（Veneering）とポドスナップに対するトウェムロウ（Twemlow）等が挙げられるが、この物語の中で最も第三項を体現する人物は、やはりヘッドストーンだと言わざるを得ない。ライダーフッドが、彼への呼びかけとして用いる「最も別の旦那」（“T’otherest Governor,” 538他）という（非標準）表現には、前提として、ライトウッド（Mortimer Lightwood）への呼びかけである「旦那」（“Governor”）、ユージーンへの呼びかけである「別の旦那」（“T’other Governor”）が存在する。間二郎の訳では、直截に「第三の旦那」となっているように、明らかな第三項の印付けと考えられる。また、テンプル・ゲートの外にいるヘッドストーンとゲートの内にいるライトウッドとユージーンという構図が示されている場面があるが（536）、極めて象徴的に三者の関係を物語っていると言えよう。この関係性における排除の暴力は、ヘッドストーンのユージーンへの襲撃という応酬の暴力を副次的に産出しつつ、結局ヘッドストーンの入水によって完遂される。しかし、ヘッドストーンが関係する三角形はこれだけではない。リジー、ユージーン、ヘッドストーンという古典的な三角形においても、第三項の位置を占め、結果的に図らずもリジーとユージーンを結びつけることになる（弁証法的三角形において、止揚の役割を担ったということであろう）。ヘッドストーンは次のように内省する。「自分は必死にあの二人を永遠に引き裂こうと努力した結果、自分が二人を結びつける手段となってしまった。この手を血に染めたのは、自分に惨めな道化の印をつけるためだったのだ」（771）。まさに本来の道化の役割であり、道化とは本源的に第三項を生きる存在なのである。

最後に、「家族」という集団における第三項排除の例を見てみよう。この集団の中で第三項の印を帯びるのは「子供」である。前近代社会から近代社会への移行の中で、共同体の概念が変容し、その矮小化、或いは分節化が促進されてきたことは言うまでもない。ある意味で、近代以降の社会における共同体は、家庭空間にまで縮小されたと言っても良いだろう。しかし、近代化された社会においても、供犠という暴力のシステムは依然存続している。この物語にも、この第三項排除の例を見ることができる。例えば、リジーがチャーリーを家から出て行かせるとき、チャーリーは「僕を片付けてしまいたいんだね」（78）と言うが、文脈を無視して言えば、典型的な口減らしに他ならない。また、ポドスナップの娘、ジョージアナ（Georgiana）は、誕生会のダンスの場面で、母親に宛がわれた「人食い鬼」に生贄として城へと連れ去られている（「人食い鬼」はダンスパートナー、「城」はダンスの先頭を意味する）（141）。これは滑稽な文飾であるが、

この後実際、彼女は詐欺師ラムル夫妻の餌食になりかける。このカニバリズムは、ウィルファー夫人のラヴィニア（Lavinia）への「まるで牡蠣を食べるかのようなキス」にも見ることができるが（660）、もう一人の娘、ベラには明らかに供犠の生贄としての役割が与えられている。彼女はオールド･ハーモンの遺産と引き換えにされた、言わば「人身御供」である。いみじくもジョン･ハーモンは、「私は、スルタンが奴隷を買うように、自分に全く愛情を感じていない女性を買い取ることになっただろう」と述懐している（367）。そして、この人身売買のイメージは、ボフィン夫妻が孤児を養子にすることを願い出た後の「孤児市場の混乱」においても見ることができる。

> For, the instant it became known that anybody wanted the orphan, up started some affectionate relative of the orphan who put a price upon the orphan's head. The suddenness of an orphan's rise in the market was not to be paralleled by the maddest records of the Stock Exchange.... The market was "rigged" in various artful ways. Counterfeit stock got into circulation. Parents boldly represented themselves as dead, and brought their orphans with them.（195）

「偽の孤児」の言及があるが、まさにこの事実は直接的な人身売買を意味することになる。もちろん、この「孤児市場」は比喩であるが、取引の成立が叶わなかった多くの子供（ほぼ全てということだが）が排除されていることは事実であろう。不成立の場合、行き先は「救貧院」やヒグデンの「託児所」のような場所ということになろう。その意味では、「救貧院育ち」（218）であるヘッドストーンも「排除される子供」という第三項をも担っていることになる。先に、下層階級自体が第三項として看做し得ることを述べたが、その階層の子供に対してその印はより相応しいと言わざるを得ない。

結び

ヘッドストーンと同様、「排除される子供」の印を帯びているのはジョン･ハーモンである。[10] 彼はケープタウンから帰国してすぐ、事件に巻き込まれ、結局溺死したと看做される。彼は、「検視は私の死を宣言し、政府は私の死を宣告した」、「まるで英国中が私の死を決めたかのようだ」（367）と述べているが、まさに彼は英国から排除されたのである。しかし、これが初めてではない。先述のように、14歳で父親に勘当され、英国を逃れた経歴を持つからである。このとき最初に、英国から排除されたのである。まさに「排除される子供」として、国の境を踏み越えざるをえなかったのである。その意味で、ジョン･ハーモンと同様、実際に英国からケープタウンに「排除される子供」が存在したことは極めて興味深い。これは、先述の「孤児市場」に関わる

問題である。つまり、街に溢れている身寄りのない浮浪児たちを労働力として南アフリカのケープタウンへ移民させる計画が立てられ、実施されたのである。エドワード・P・ブレントン（Edward P. Brenton）という社会改良家が中心となり、1830年代に行われたが、まず非行少年の矯正と労働力不足の解消という功利的な狙いがあった。しかし、「まず何よりも英国から望ましくない子供を排除すること、そして同時に現地に満足できる奴隷の代替を提供することが意図されていた」（165）とエドナ・ブラッドロー（Edna Bradlow）は指摘している。1833年に成立した「奴隷制度廃止法」が労働力不足の一因だったようである。実際、現地では「白い家畜市」において子供たちの売買が行われた例もあったという（162）。森本真美の言葉を借りれば、まさにこれは「棄民」政策であり（233）、当時行われていたオーストラリアへの犯罪者の流刑と本質的に何ら変わるところはないのである。まさしくポドスナップの右手の一振りよろしく、不愉快なものは国外に跳ね飛ばせばよい、と言わんばかりである。この背景には、本国による植民地の搾取という状況も無視できないであろう。その意味で、本国と植民地を親子関係に捉えて考えれば、また別の「排除された子供」の表象が見えてくるのではないか。

最後に徒し事を一つ。ジョン・ハーモンは、ケープタウンで「経営者、農場主、栽培業者、のようなこと」（25）を生業にしていたことが言及されている。つまり、英国からケープタウンにやってきた非行少年たちを雇っていた可能性を考えてみたくなるではないか。ある意味で、彼らもこの物語におけるもう一つの「排除される子供」として看做すことができるのではないだろうか。

注

1　この物語におけるテムズ河の情景、そしてその川辺に巣くう「河原者」の様相は、前作『大いなる遺産』（*Great Expectations*, 1860-61）からの連続性の中に捉えることができる。例えば、言葉の使用についても、川辺の住人を誇張して表した「水陸両棲の」（“amphibious”）という形容詞（*GE* 434; *OMF* 80）、或いは川岸やボートに付着した「ぬるぬる、べたべた」（“ooze and slime,” *GE* 374; “slime and ooze,” *OMF* 13）といった印象的な文彩を共通して認めることができる。特に、後者の「ぬるぬる、べたべた」は、川辺の情景を遠景としてピクチャレスクに映すのではなく、接写の中に生々しい現実を映し出そうとする意識を背後に感じ取ることができる。この言葉が生み出す汚穢とそれに伴う忌避の感覚は、住人を含む川辺の情景全体を遍く覆い尽くしていると言って良いだろう。また、共通項は言葉だけではない。『大いなる遺産』にもギャファー・ヘクサムに似た存在を確認できる。ピップ (Pip) はテムズ河口の宿屋で「べたべた、ねとねとした」（“slimy and smeary,” 440）「何でも屋」（“the Jack”）に出会うが、彼は彼の履いている靴が溺死体から掠め取ったものだと自慢する (440)。忌まわしき行為の侵犯、如何わしき川辺の生態の一端を窺い知ることができる。この川辺の情景、住人に関わるテーマは、『互いの友』においてより十全に展開され、より深化されていることは言うまでもない。

2　プラッシュウォーター水門という名は架空のものだが（或いは、ライダーフッドの出任せかもしれないが）、コッツェルの考証によれば、ヘンリー（ヘンリー・オン・テムズ）より 3 マイル程下流の「ハーリー水門」がその場所に相当する（218）。物語中の「オクスフォード州の州境」という言及は（521）、おそらくコッツェルの推論の材料の一つになったと考えられるが、ヘンリー（オクスフォード州に所属）はロンドンのほぼ

真西に当たる。

3　ライダーフッドと同様、ユージーンも此岸と彼岸の間を何度も往復することになる。このとき、ジェニー・レンはユージーンの回復に大きな助けを与えるが、ガレット・スチュワート（Garrett Stewart）は、レンが彼岸を流離うユージーンと連絡できる秘密の力を持つと指摘する（218）。確かに、想像の花や鳥を感じ取ったり（238）、屋上庭園から繋がる天上の世界を感知する等（279）、レンには想像の世界、或いは見えない世界を感得できる能力が付与されている。この物語は境界の住人で満ちているといえるが、レンは見える世界と見えない世界を架橋することできるという点で、やはり境界の住人と看做すことができる。

4　当初は河沿いにも壁は設置されていたようだが、1150年頃までには取り壊されたようである（Weinreb 173）。

5　ウォッピングにはかつて海賊の処刑場があり、19世紀の人々にとってもその記憶は鮮明であったようだ（Weinreb 267）。ちなみに、クィルプ（Quilp）が最期を遂げる場所がここである。彼もまた水辺の住人たる異人であり、その意味でこの場所は極めてクィルプに相応しい。

6　フレジビーはライア（Riah）との関係において、この二重性を保持している。つまりフレジビーの善と悪の表裏を反転させれば、ライアの二重性ということになる。彼の二重的役割は通常のイメージを逆転させたものだが、ライアはユダヤ人である故、彼は本来的に境界の住人だと言える。なお、グロスマン（Jonathan H. Grossman）は、ライアのこのような人物造型は、ユダヤ人を現実的に描くことをあえてしなかったディケンズの戦略であると述べている（49）。

7　もう一度、ボフィンの属性とも言える杖に留意してみたい。先述したボフィンの杖に準えられた「使い魔」（“Familiar Spirit”）である。この「使い魔」には、『骨董屋』（*The Old Curiosity Shop*）で言及されている「ドン・クレオファスと彼の使い魔」（“Don Cleophas Leandro Perez Zambullo and his familiar,” 250）、つまり悪魔アスモデウスが含意されていると考えられる。ル・サージュの『跛の悪魔』に登場する、空を飛び、家の屋根を剥がして、中を覗き見できる霊力を持つ「使い魔」のことであるが、俯瞰の視、全知の視を体現するモデル・イメージとしてディケンズ世界ではお馴染みのイコンと言って良いだろう。複数の批評家がこの物語における語り手の全知性の欠如を指摘しているが（Miller 292 ; Hutter 137 ; Arac 181）、この杖を通じてボフィンにその名残りが印されたのかもしれない。なお、アラクも指摘しているように（181）、ウェッグは盛んにアスモデウスのように想像の中の屋根剥がしを行うが（53, 493, 643）、全く実効はなく、単なるパロディ的再現となっている。

8　今村仁司は、第三項＝ファルマコンとしている。今村によれば、ファルマコン（パルマコン）は、「パルマケーの泉」の伝説に由来するが、ギリシア語で毒と薬の両義性をもつ。「パルマコンは、病気を治す薬であると同時に人を殺す毒の両義的含意をもつことになった」。そこから「パルマコン的存在者は、一方では伝統によって排除され抑圧される犠牲者‥‥‥であると同時に他方では既存の価値・社会秩序への根源的批判者でもある」（『現代思想を読む事典』 489-90）。

9　セジウィック（Eve Kosofsky Sedgwick）はこの物語中に、「ジラール的三角形の鎖」が存在すると指摘している（181-2）。すなわち、ヘクサム家のギャファー・リジー・チャーリーの三角形に始まり、チャーリー・リジー・ブラッドリーの三角形に、そしてブラッドリー・リジー・ユージーンの三角形に、さらにリジー・ユージーン・モティマーへと連鎖していく。その背後にはセクシャリティーが読み込まれている。また、この物語には、他のディケンズ作品と同様、多くの「ダブル」の関係も見ることができる。ボーデンハイマー（Rosemarie Bodenheimer）は、以前のディケンズに見られた「分裂のダブル」（善と悪等）に代わって、この物語では「融合のダブル」が見られると言う（168）。例えば、ユージーンとヘッドストーンをダブルとして捉え、アイデンティティーの融合によって、例えば、ユージーンは回復後、ヘッドストーンの性質（エネルギー、結婚願望等）を帯びるようになるというものである。

10　14歳でジョン･ハーモンは専横な父親によって家庭空間から放逐されたのであるが、この身勝手な父親と「排

除される子供」という記号はディケンズ自身をも指し示している。12歳で家庭から言わば排除されるかのように靴墨工場へ働きに出されたディケンズも、やはり第三項の印を帯びた子供として看做すことができるのではないか。ジョンがそのとき国境を踏み越えて新しい世界に臨んだように、ディケンズは階級の境を越え、下層の人々の世界へ参入せざるをえなかったのである。このことがディケンズの生涯の精神的外傷となったことは良く知られているが、同時にこの経験が彼の小説家人生に大いに資するところであったことも想像できる。あらゆる階級を知悉していることが小説家にとって極めて有益であることは明らかである。例えば、エドマンド・ウィルソン（Edmund Wilson）は、ディケンズが受け入れざるをえなかった功罪、つまり、あらゆる階級を見知ることのできる状況、そして疎外感、属すべき場所の欠如を指摘している（42）。言い換えれば、ディケンズも境界を流離う「潜在的放浪者」だということである。

参照文献

Arac, Jonathan. *Commissioned Spirits: The Shaping of Social Motion in Dickens, Carlyle, Melville, and Hawthorne*. New Brunswick: Rutgers U. P., 1979.

Bodenheimer, Rosemarie. “Dickens and the Identical Man: *Our Mutual Friend* Doubled,” *Dickens Studies Annual* 31（2002）: 159-74.

Bradlow, Edna. “The Children’s Friend Society at the Cape of Good Hope,” *Victorian Studies* 27 (1984): 155-77.

Burke, Peter. *Popular Culture in Early Modern Europe*. Aldershot: Wildwood House, 1978.

Cotsell, Michael. *The Companion to Our Mutual Friend*. London: Allen & Unwin, 1986.

Dickens, Charles. *Great Expectations*. London: Penguin, 1998.

————. *Old Curiosity Shop*. London: Penguin, 2000.

————. *Our Mutual Friend*. London: Penguin, 1997.

Gibbon, Frank. “R. H. Horne and *Our Mutual Friend*.” *The Dickensian* 81（1985）: 140-43.

Grossman, Jonathan H. “The Absent Jew in Dickens: Narrators in *Oliver Twist, Our Mutual Friend*, and *A Christmas Carol*,” *Dickens Studies Annual* 24（1996）: 37-57.

Horne, R. H. “Dust; or Ugliness Redeemed,” *Household Words* 16 (13 July, 1850): 379-384.

Hutter, Albert D. “Dismemberment and Articulation in *Our Mutual Friend*,” *Dickens Studies Annual* 11（1983）: 135-175.

Hyde, Lewis. *Trickster Makes This World : Mischief, Myth, and Art*. New York : North Point Press, 1999.

Kettle, Arnold. “*Our Mutual Friend*.” *Dickens and the Twentieth Century*. Ed. John Gross and Gabriel Pearson. London: Routledge and Kegan Paul, 1962.

Leach, Robert. *The Punch and Judy Show; History, Tradition and Meaning*. London: Batsford Academic and Educational, 1985.

Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. 4 Vols. 1861-62. New York: Cosimo, 2009.

Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: the World of His Novel*. Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1965.

Sedgwick, Eve Kosofsky. “Homophobia, Mysogyny, and Caital: The Example of O*ur Mutual Friend*,” *Charles Dickens*. Ed. Steven Connor. London: Longman, 1996.

Simmel, Georg. *On Individuality and Social Forms*. Chicago: University of Chicago Press, 1971.

Stewart, Garrett. *Dickens and the Trials of Imagination*. Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1974.

Weinreb, Ben, and C. Hibbert. ed. *The London Encyclopaedia*. London: Macmillan, 1987.

Welsford, Enid. *The Fool : His Social and Literary History*. Gloucester, Mass.;Peter Smith, 1966.

Willeford, William. *The Fool and His Sceper : A Study in Clowns and jesters and Their Audience*. Northwestern U.P., 1969.

Wilson, Edmund. *The Wound and Bow; Seven Studies in Literature*. Athens: Ohio University Press, 1997.

赤坂憲雄『境界の発生』講談社、2003。

阿部謹也『中世賤民の宇宙－ヨーロッパ原点への旅－』筑摩書房、2007。

――――『中世を旅する人びと－ヨーロッパ庶民生活点描－』平凡社、1978。

網野善彦『中世の非人と遊女』講談社、2005。

今村仁司『暴力のオントロギー』勁草書房、1982。

――――『排除の構造』筑摩書房、1992。

――――編『現代思想を読む事典』講談社、1988。

エリアーデ、ミルチャ『エリアーデ著作集第四巻　イメージとシンボル』前田耕作訳　せりか書房、1994。

出口保夫『ロンドン・ブリッジ－聖なる橋の2000年－』朝日イブニングニュース社、1984。

森本真美「聖書と鋤－児童友援協会のケープ非行少年移民－」『周縁からのまなざし－もうひとつのイギリス近代－』川北稔・指昭博編　山川出版社、2000。